

## 1. 地域の概要

### (1) 地理的位置

表 地理的位置

国名及び地域	北アメリカ アメリカ合衆国 バーモント州 バーリントン市
経緯度	北緯 44 度 28 分 0 秒、西経 73 度 9 分 0 秒 (バーリントン市)

### (2) 自然環境（地形、気候、植生及び土壌等）

- ・バーリントン市は、全米第 6 位の湖であるシャンプレーン湖の湖岸に位置する風光明媚な都市であり、周囲を豊かな自然環境に恵まれている。
- ・バーリントンの気候はカナダの気候に近く、冷涼な夏と寒さの厳しい冬に特徴付けられる。霜の降りない夏の期間は 4 ヶ月ほどである。一方、冬は氷点下の日が 3 ヶ月にわたってほぼ毎日続く。年間降水量は約 1,000mm である。年間降雪量は 200cm にも達する。ケッペンの気候区分では、Df（亜寒帯湿潤気候）に属する。

### (3) 社会的背景（人口、産業、歴史等）

- ・バーモント州は、アメリカ合衆国の東北部に位置し、人口 56 万、州内最大の都市バーリントンでも人口約 4 万人という小さな州である。
- ・州の主な産業は、恵まれた自然環境を生かした観光と農業である。冷涼な気候のため、酪農、りんご栽培、メープルシロップなどが特産品である。
- ・バーモント州の州民は昔から「自由のために闘ってきた土地」という自負心が強く、現在でも市民意識の強い土地柄である。また、州政府は税収が少ないため、小さい政府への指向が強く、NPO 等との連携が必然的に盛んである。

## 2. 地域の自然資源の利用・管理の実態

### (1) 自然資源の利用・管理の経緯と現状

- ・現在のバーリントン市に当たる地域にヨーロッパからの移民の入植が始まったのは 1770 年代のことである。アメリカ独立戦争後にこの地は整備され、農業が起こった。1787 年に初めて町会が開催され、1791 年にはバーモント農業大学（現：バーモント大学）が創立された。
- ・湖岸に位置するため元々交通の利便性が高かったが、1823 年にはシャンプレーン湖運河によって南はニューヨーク、北はモントリオールと結ばれ、さらに鉄道網が整備されると、米国北東部諸州やカナダのケベック州各地へ牛乳を売ることができるようになり、バーリントン一帯は酪農の中心

地となった。

- ・このようにバーリントン市周辺では、古くから農業開発が行われてきたため、自然環境の多くは牧場や農地などの二次的自然であり、現在でも酪農や農業が主要産業である。

## (2) 自然資源の利用・管理の問題点及び生物多様性への影響

- ・バーモント州を始めとするアメリカ北東部の農業は、米国の中では経営規模が小さいため、国内他地域の大規模経営農場からの農産物や、海外からの輸入農産物に押されて衰退傾向にあり、農業後継者の不足と高齢化が進行している。
- ・バーモント州の農業者の平均年齢は 50 代半ばであり、また半分以上の農場が赤字経営と言われている。

## (3) 上記問題点の解決に向けた地域計画等

(既往資料から把握することはできなかった。)

# 3. 取組事例の詳細

## (1) 取組事例の全体像

### 1) インターベールセンターの概要

- ・1986 年に、ウィル・リープ氏（造園会社の経営者）は、ゴミ捨て場と化していた谷（インターベール）を農地として回復させ、バーリントン市に農産物を供給するための取組を開始した。
- ・インターベールセンター（当初はインターベール財団）は、この場所で 20 年以上にわたって持続可能な農業に取り組み、今日では全米で知られる組織に成長している。
- ・1980 年代には、危険で、汚染され、そして誰も寄りつかなかった場所が、今日では、ユニークな共同体、健全な自然環境、地元産の食材などに支えられた、環境と収入を両立した農業の場として再生されている。
- ・インターベール農園には、ウィヌースキ川に沿った 350 エーカーの農地、道、野生生物コリドー、自生植物の育苗施設、及び堆肥生産施設などがある。
- ・インターベールセンターの運営は、行政からの交付金、個人及び企業からの寄付等によって成立している。
- ・インターベールセンターの目標は、①農業振興、②農地生産力の維持、③地元産の自然食品の普及、④生態系配慮型農業と流域保全による水質保護 の 4 つである。
- ・インターベールセンターの事業内容は下記の通りである。

- ①Farms Program（新規農業者の育成プログラム）
- ②Success on Farms（農業の持続可能性と収益性を高めるためのプログラム）
- ③Intervale Food Hub（地元産農産物の産直プログラム：CSA）
- ④Intervale Consulting（インターベールセンターの経験を生かしたコンサルティング事業）
- ⑤Intervale Conservation Nursery（河畔林の育成及び生物多様性保全事業）
- ⑥Intervale Land Stewardship（インターベール農園の運営）
- ⑦Community Connections（教育機関等と連携した農業体験等）
- ⑧Research（調査事業）

## 2) Intervale Food Hub（地元産農産物の産直プログラム：CSA）について

- ・ CSA（Community supported agriculture：地域支援型農業）とは、主に有機農業を実践する農家が、その生産物を地元消費者に直接供給することであり、生産者と消費者の間で予め農産物の生産量や内容、価格、運送・分配方法等を取り決めて契約を交わし、消費者が事前に代金を支払うことによって両者がリスクを分担する。
- ・ 米国における CSA の始まりは 1980 年代半ばであり、それ以降、北東部及びカリフォルニア州を中心に普及しており、1999 年に実施された全米調査では、少なくとも 364 の農場が CSA に取り組んでいることが明らかにされている。
- ・ この背景には、消費者による「安全・安心・新鮮な農産物」に対するニーズの高まりや、フードマイレージ削減に対する関心の向上等がある。
- ・ インターベールセンターによる CSA は、20 のコア農場が参加し、センターが消費者との仲介役となり、毎週 1 回新鮮な農産物を供給するものであり、既存の流通ルートや他の CSA と競合することなく、若手農業者や新規就業者、環境配慮型農業に取り組む意欲的な農業者などに販売の機会を与えることを目的としている。

## 3) Intervale Conservation Nursery（河畔林の育成及び生物多様性保全事業）について

- ・ インターベール農園は河川に隣接しており、その河畔の森林は、野生生物の生息・生育の場、土壌浸食の抑制、農業用水の水質向上などにおいて、重要な役割を果たしている。
- ・ Intervale Conservation Nursery（ICN）とは、上記のような河畔林の多面的機能の向上を目的として、州全体の自然保護プロジェクトの一環として地域原産の樹木を育てるものである。
- ・ 以前実施されていた植樹活動では、遠く離れたミシシッピー川の苗木を用いており、種の選択自体は間違っていなかったが、穏やかな気候で育った苗木は寒冷なバーモント州の気候を乗り切れず、その上遺伝子レベルでは望ましい行為とは言えないため、2002 年に開始された ICN では、自生種の植林に切り替えられた。
- ・ 植樹によって形成された樹林地は、タカが営巣するなど生物多様性が向上しており、また、地域住民によるレクリエーションの場としても利用されている。

## (2) SATOYAMAイニシアティブの「5つの視点」から見た自然資源の利用・管理の詳細

本事例と5つの視点の主な関係は、下表に示すとおりである。

表 本事例と5つの視点の主な関係

5つの視点	本事例との関連
1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴミ捨て場と化していた都市近郊の二次的自然が、持続可能な農業や植林活動を通じて再生され、地場産の食糧供給、野生生物の生息・生育の場、土壌浸食抑制、水質向上、レクリエーション等の多面的な機能を発揮する場として甦っている。</li> <li>・インターバール農園や、CSA事業を通じて連携している農家の農園では、有機農業などの持続可能な農業が実践されている。</li> </ul>
2) 自然資源の循環利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食品廃棄物を用いたコンポストを生産し、インターバール農園や周辺の農地で活用している。</li> </ul>
3) 地域の伝統・文化の評価	(特記なし)
4) 多様な主体の参加と協働	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターバールセンターの運営は、行政からの交付金、個人及び企業からの寄付など、地域の多様な主体によって支えられている。</li> <li>・消費者と連携したCSA、学校と連携した環境教育プログラム、市民と協力した植樹活動など、地域の多様な主体と連携した取組を実践している。</li> </ul>
5) 地域社会・経済への貢献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターバールセンターが新規就農者の育成プログラムを実施し、さらにCSA事業が新規就農者や意欲的な農業者の販売の受け皿となることにより、地域における農業及び農地の継承に貢献している。</li> </ul>

以上

### 参考文献等

- ・ビル・ミッチェル (2008)、「米国バーモント州バーリントン市における都市近郊での食農連携事業」(特定非営利活動法人こども環境活動支援協会主催「都市近郊における農地の役割と持続可能な地域づくりを考える」国際シンポジウム資料)
- ・インターバールセンター ホームページ (URL : <http://www.intervale.org/index.shtml>)
- ・大山利男「アメリカのCSA：地域が支える農業」(のびゆく農業 - 世界の農政 - No.944, 2003)